

The Effect of Reading Strategy Instruction and its Effect on Japanese University Students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石原, 果奈 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6740

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



リーディング・ストラテジーの活性化と 長文読解におけるその効果

石原果奈

序論

ストーリー・リテリングと長文読解の関連性を研究した際、リテリング課題を与えることによって、①重要な出来事を示す箇所に線を引く、②登場人物の心理・行動に着目する、の2つのリーディング・ストラテジーの使用度は上昇したにもかかわらず、長文読解は向上しなかった。このことから、リーディング・ストラテジーと長文読解の間には、複雑なメカニズムが存在することがうかがえた。

リーディング・ストラテジーと長文読解についての先行研究では、ストラテジーのレパートリーの広さと使用度を尋ねる質問紙を用いたストラテジー使用と長文読解の相関究明をめざす研究が多く、リーディング・ストラテジーの指導効果に関する研究は不足している。よって、指導が長文読解に及ぼす効果を検討する必要がある。

この研究を通して明らかにするのは以下の2点である。

- 1) リーディング・ストラテジー指導によるストラテジー使用意識の向上。
- 2) リーディング・ストラテジー使用意識の向上による長文読解の向上。

研究目的を達成するために実験を行う。被験者は日本人大学生72名。被験者は、実験群と統制群に分かれ、実験群に対しては、長文読解力を測定する事前テストと事後テストの間にストラテジー指導を行う。統制群に対しては指導を行わない。また、ストラテジー使用意識を尋ねるための事前・事後アンケートも行う。分析においては、両群を事前テストの得点に基づき読解力上位群と下位群に分けて、読解力の差が及ぼす影響も検討する。

1. 先行研究のまとめ

リーディング・ストラテジーと読解力の相関、及び指導効果についての研究は、鈴木・森永(2010)、山下・横山(2004)、足立・大石(2017)など多くの研究者によって行われていた。しかし、思うような結果は得られず、そ

それぞれの研究結果に課題が見られた。

鈴木・森永（2010）では、計 59 項目のストラテジーが書かれた質問紙を用いて、読解力テストとストラテジーの活用度の相関を明らかにした。その結果、ストラテジーと読解力との間にはほとんど相関が見られなかった。この原因の 1 つは、テストには必要のないストラテジーが含まれていたことが考えられる。

山下・横山（2004）は、テストでどのようにストラテジーを使用しているかを知るために、被験者には問題を解いている最中に think-aloud protocols を行なわせ、それを IC レコーダーに録音した。分析の結果、ストラテジーの使用度は増加したが読解力テストの得点は向上しなかった。これはリーディング・ストラテジーの 1 年間の自然な発達を見ることを目的とし、ストラテジー指導は行われなかったので、読解力が向上しなかったと考えられる。

足立・大石（2017）は、リーディング・ストラテジー指導を英語で行うことによって、被験者の読解力を向上させた。しかし、指導の際に語彙指導も行っていたため、結果は純粋にストラテジーの指導効果を示しているとは言えない。以上から、ストラテジー指導による読解力向上を主張する先行研究は不十分であることが明らかになった。

そこで次章では、日本語でストラテジー指導を実施して、それが長文読解に及ぼす効果を検討する。

2. 実験

2.1 リサーチ・クエスチョン

リサーチ・クエスチョンとして以下の 2 点を設定した。

- (1) リーディング・ストラテジー指導は、ストラテジー使用意識を高めるのだろうか。
- (2) リーディング・ストラテジー使用意識が高まると、長文読解は向上するのだろうか。

2.2 被験者

私立大学文学部英文学科・社会情報学部に所属する大学 2 年生 72 名を対象とした。また、その 36 名を実験群 18 名、統制群 18 名の 2 群に分けた。ストラテジー指導の前に行った事前テストでは、実験群の平均点は 4.83 点

に対し、統制群の平均点は4.39点である。なお、両群の間の平均点には有意差は見られなかった [$t(58) = 0.99, p < 0.32$]。したがって両群は読解力において等質集団であると言える。さらに、両群それぞれを読解力上位群と下位群に分けた。事前テストの5点以上を上位群、4点以下を下位群と設定した。

2.3 指導内容

実験で用いる長文は、2011年、2012年大学センター試験長文問題を使用した (Appendix III, VII を参照)。2つの長文とそれに伴う試験問題はパイロットテストを行い、どちらも等質であることを確認した [$t(18) = 0.34, p < 0.73$]。また、2つの長文のリーダビリティを測定した結果、61.6、58.4と難易度はほぼ等しいことも確認した。

実験で用いるリーディング・ストラテジーは以下の5つである。

- ① 「未知語推測」
- ② 「代名詞の理解」
- ③ 「接続詞の活用」
- ④ 「トピック把握」
- ⑤ 「メインアイデア把握」

上記5つのリーディング・ストラテジーの選定理由は以下の3点である。

- a. 先行研究で効果が示唆されている。
- b. 限られた時間内で指導が可能である。
- c. 効果を測定するための読解問題として出題しやすい。

読解問題は、5つのリーディング・ストラテジーに対応する設問を11問設定した。回答は4択方式の1問1点の11点満点とした。本研究での読解問題は、以下の表に示す5つのリーディング・ストラテジーに対応した設問となっている。

リーディング・ストラテジー	ストラテジーに対応する設問
①未知語推測	問1 (ア) ~ (エ)
②代名詞の理解	問2 (a), (b)
③接続詞の活用	問3 [1], [2]
④トピック把握	問4
⑤メインアイデア把握	問5

表1. リーディング・ストラテジーに対応する読解問題の設問

先行研究では、ストラテジー使用度をアンケートで評価していたが、アンケートは被験者本人による自己評価であり、実際のストラテジー使用状況を客観的に把握できない。そのため、本研究では事前・事後アンケートを使用した被験者の自己評価を「リーディング・ストラテジー使用意識」と呼び、分析する。

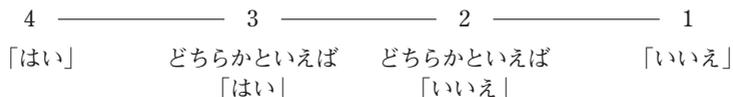
2.4 実験の内容と手順

実験群	統制群
1日目	1日目
①事前アンケート (10分間)	事前アンケート (10分間)
②単語確認テスト (5分間)	単語確認テスト (5分間)
③事前テスト (20分間)	事前テスト (20分間)
2日目 (1週間後)	2日目 (1週間後)
④指導 (30分間)	
⑤事後テスト (20分間)	事後テスト (20分間)
⑥事後アンケート (10分間)	事後アンケート (10分間)

表2. 実験手順

①リーディング・ストラテジー使用意識を尋ねるための事前アンケートを行う。5つのストラテジーに対して4段階のリカットスケールで回答を求めた。

- 意味の分からない単語は、どのような意味か前後の関係から推測しようとする。



②被験者が実験で用いる英単語を知っているかどうかを事前に確認するために、単語確認テストを行い、以下のように英単語の意味を日本語で回答してもらった。単語確認テストで正当だった問題は、分析対象からはずした。

(1) to resist temptation	(1)
(2) to pursue	(2)

③事前テストとして20分間で長文を読んで問題に解答する。事前テストでは、以下の設問を被験者に回答してもらった。

問1. 下線部(ア)～(エ)の意味として適切なものを選びなさい。

(ア) “to resist temptation”

- 1) 強い願望や欲望に抵抗する。
- 2) 怒りを抑制する。
- 3) 仕事の計画を立てる。
- 4) 誘いに乗る。

問2. 下線部(a), (b)が表すものとして適切なものを選びなさい。

(a) “they” (line 21)

- 1) those who believe that they can perform well.
- 2) those who have low expectations of success
- 3) some people who have too much confidence
- 4) some counselors

④実験に用いる5つのリーディング・ストラテジーの指導を行う。

最初に指導するストラテジーについての説明を行い、次に例題を用いながらストラテジーの使用を実演する。その後、練習問題を用いてストラテジーの練習を行う。ここで用いる教材は、*Making Connections* ①, ② (Pakenham et.al, 2013; Cambridge) から引用した。

⑤ストラテジーの指導後、事後テストとして20分間で長文を読んで問題に解答する。事後テストでも、以下のように事前テストと同様の問題形式で出題した。

問1. 下線部(ア)～(エ)の意味として適切なものを選びなさい。

(ア) “nutritious”

- 1) とてもおいしい
- 2) 硬い
- 3) 栄養価の高い
- 4) 育ちがよい

問2. 下線部(a)が表すものとして適切なものを選びなさい。

(a) “so” (line 6)

- 1) Rodents have a strong position.
- 2) There are about 2,000 species of mammal.
- 3) Rodents are the biggest group among animals.

- 4) The rodent group is over 40% of animals.

⑥実験後に事前アンケートと同様の事後アンケートを行う。

3. 結果

3.1 リーディング・ストラテジー使用意識の向上

ストラテジー使用意識を尋ねるための事前・事後アンケートを行った。ここでの事前・事後アンケートでは、4段階のリカートスケールの得点についてそれぞれ「いいえ」を0点、「どちらかといえばいいえ」を1点、「どちらかといえばはい」を2点、「はい」を3点の15点満点とした。

被験者 (n = 72)	事前	事後
	平均点	平均点
実験群 上位群 (n = 18)	11.33	11.78
実験群 下位群 (n = 18)	10.22	12.22
統制群 上位群 (n = 18)	10.28	10.72
統制群 下位群 (n = 18)	9.83	9.83

表 3. 実験群と統制群の習熟度別ストラテジー使用意識の変化 [15 点満点]

実験群の習熟度別事前・事後アンケートが示すストラテジー使用意識は、指導前後で上位群の上昇は0.45点だったのに対し、下位群は2.00点上昇した。統制群の習熟度別事前・事後アンケートが示すストラテジー使用意識は、指導前後に上位群は0.44 点上昇し、下位群は変わらなかった。

要因	F 値	P 値
指導	F (1, 34) = 10.73	p < .002
習熟度	F (1, 34) = .198	p = .659
指導*習熟度	F (1, 34) = 4.34	p < .045

表 4. 実験群の分散分析結果 (事前・事後アンケート)

両群にストラテジーの指導前後（事前・事後アンケート）×習熟度（上・下）の2元配置分散分析を行った結果、統制群に有意差はなかったのに対し、実験群は習熟度の主効果は有意ではなかったが、指導の主効果は有意であった。また、指導と習熟度要因の交互作用にも有意差が表れた。さらに習熟度別で見ると、上位群は有意ではなく下位群は有意であった [$t(17) = 1.14, p = 0.13$], [$t(17) = 3.14, p < .01$]。

3.2 長文読解の向上

ストラテジー指導前と指導後に事前・事後テストとして長文読解テストを行った。長文読解テストは、5つのストラテジーに対応する設問11問で設定し、回答は4択方式で、1問1点の11点満点である。

被験者 (n = 72)	事前テスト	事後テスト
	平均点	平均点
実験群 上位群 (n = 18)	6.72	6.00
実験群 下位群 (n = 18)	2.94	4.83
統制群 上位群 (n = 18)	5.56	4.94
統制群 下位群 (n = 18)	3.22	3.33

表 5. 実験群と統制群の習熟度別事前・事後テスト
平均値 [11 点満点]

統制群の習熟度別事前・事後テストで示す長文読解は、指導前後で上位群は0.62点減少し、下位群は0.11点上昇した。実験群の習熟度別事前・事後テストが示す長文読解は、指導前後で上位群が0.72点低下したのに対し、下位群は1.89点向上した。

要因	F 値	P 値
指導	F (1, 34) = 5.83,	p < .021
習熟度	F (1, 34) = 33.59	p < .01
指導*習熟度	F (1, 34) = 29.22	p < .01

表 6. 実験群の分散分析結果（事前・事後テスト）

両群にストラテジーの指導前後（事前・事後アンケート）×習熟度（上・下）の2元配置分散分析を行った結果、統制群に有意差は表れなかったのに対し、実験群においては、指導と習熟度の主効果が有意であった。また、指導と習熟度要因の交互作用にも有意差が表れた。さらに習熟度別で見ると、上位群・下位群ともに有意であった [t(17)=2.25, p=0.02], [t(17)=5.23, p<.01]。

3.3 ストラテジーごとの分析

3.3.1 各ストラテジーの使用意識

事前・事後アンケートによるストラテジー使用意識において、実験群上位群の平均点は、「接続詞の活用」、「メインアイデア把握」、「トピック把握」が上昇し、「未知語推測」、「代名詞の理解」が下降した。一方で、実験群下位群では、すべてのストラテジーの平均点が上昇した。

3.3.2 ストラテジーごとの長文読解の変化

事前・事後テストによる長文読解において、実験群上位群の平均点は「トピック把握」に対応した問題のみ上昇し、それ以外のストラテジーに対応した問題は下降した。一方で、実験群下位群はすべてのストラテジーに対応した問題の平均点が上昇した。

さらに、一部においてストラテジー使用意識を示す事前・事後アンケートと長文読解を示す事前・事後テストの得点の差が共通していた。それらのストラテジーを抜粋し、そのストラテジーの事前・事後テストと事前・事後アンケートの平均点にt検定を行った。

被験者	ストラテジー	事前ア 平均	事後ア 平均	t 値
実・上位群	代名詞	2.33	2.11	1.07 n.s
実・下位群	代名詞	1.78	2.39	3.33 **
	メインアイデア	1.89	2.33	2.70 **
	トピック	2.00	2.28	1.31 *

n.s: not significant, * : p<.05, ** : p<.01 (df=17)

表7 事前・事後アンケート抜粋ストラテジーのt検定結果

被験者	ストラテジー	事前テ平均	事後テ平均	t 値
実・上位群	代名詞	1.28	0.72	2.40 **
実・下位群	代名詞	0.28	0.50	1.46 *
	メインアイディア	0.11	0.94	2.92 **
	トピック	0.06	0.39	5.00 **

* : $p < .05$, ** : $p < .01$ (df=17)

表 8. 事前・事後テスト抜粋ストラテジーの t 検定結果

各ストラテジーで見ると、ストラテジー「代名詞の理解」に対応した設問の平均点が実験群上位群は 0.56 点下降したのに対し、下位群は 0.22 点上昇した。なお、両群ともに「代名詞の理解」に対応した設問の平均点に有意差が表れた [$t(17) = 2.40$, $p < .01$], [$t(17) = 1.46$, $p = .08$]。また、実験群下位群では、「メインアイディア把握」が 0.83 点、「トピック把握」が 0.33 点上昇し、さらに有意差が表れた [$t(17) = 2.92$, $p < .01$], [$t(17) = 5.00$, $p < .01$]。

4. 考察

4.1 リサーチ・クエスチョン (1)

「リーディング・ストラテジー指導はストラテジー使用意識を高めるのだろうか」について。

リーディング・ストラテジー指導を行うことによって、下位群のみストラテジー使用意識を高めた。これは、上位群は今回のストラテジー指導を行う前からリーディング・ストラテジーを使用していた被験者が多く、天井効果によりそれ以上向上しなかったからだと考えられる。実際に、上位群の事後アンケートからは「リーディング・ストラテジーという言葉は初めて聞いたが、自然にやっていた方法が多かった」と既存の知識であるとの指摘があった。一方で、下位群は指導前のストラテジー使用意識は上位群よりも低かったが、指導後のストラテジー使用意識は上位群よりも向上して下位群にのみ有意差が表れた。

4.2 リサーチ・クエスチョン (2)

「リーディング・ストラテジー使用意識が高まると、長文読解は向上する

のだろうか」について。

ストラテジー指導を行うことによって下位群の長文読解は向上した。上位群は、ストラテジー指導を行う前からストラテジー使用意識が高く、事前テストの得点は下位群に比べ3.78点高かった。したがって、事前テストと事後テストとの間に有意差が現れなかったと考えられる。また、上位群は、既に確立した自分の読み方にストラテジー指導によって与えられた知識が干渉し、指導が長文読解の妨げになってしまった可能性がある。実際に、ストラテジー指導に対して上位群には、事後アンケートで「今回学んだストラテジーに慣れず時間がかかった、ストラテジーに意識が行き過ぎて長文の内容が飛んでしまった」とストラテジー指導に対して否定的な意見が多かった。それに対して下位群は、指導前のストラテジー使用意識は上位群に比べて低かったため、指導を通して上位群が指導前から知っていたストラテジー知識を得ることによって上位群との読解テストの得点の差を縮めることができた。事後アンケートでは、今回の指導について否定的な意見が多かった上位群とは対照的に、「読解問題を解くのに役に立った、問題が解きやすくなった」と肯定的な意見が多かった。

さらに、ストラテジーと長文読解の因果関係を検討する。ストラテジー使用意識と長文読解の相関は実験群上位群では指導前より強い相関が表れた [$r = 0.43$, $r = 0.70$]。一方で、下位群では、指導前と後の双方において相関はほとんど見られなかった [$r = -0.11$, $r = -0.16$]。つまり、下位群のストラテジー使用意識の向上が長文読解の向上につながったとは言えない。下位群の場合、自己評価する際に自身のストラテジー使用を客観視できず、ストラテジーを使えているのに低く評価したり、ストラテジーを使えていないのに使えていると過大評価してしまったりしている可能性がある。しかし、上位群では、指導前後でストラテジー使用意識と長文読解に中程度と強い相関があった。これは、上位群においては自身を適切に評価することができ、自己評価におけるストラテジー使用意識の信頼性が高いことを示唆していると考えられる。これまでストラテジーと長文読解についての多くの先行研究では、被験者の自己評価によるアンケートを用いてストラテジー使用度を測定していたが、今後それらの相関を研究する場合は、ある程度習熟度が高い被験者を対象とすることで研究の信頼性が向上すると考えられる。

各ストラテジーの事前・事後テストの得点を見ると、ストラテジー「代名

詞の理解」と対応した設問の得点が実験群上位群は下降しているのに対し、下位群は上昇している。これについて、足立・大石（2017）は、ストラテジー指導を行うことによって習熟度上位群はより丁寧に細かく読む傾向が表れ、下位群は全体の流れを捉えてスムーズに読むようになったと述べている。本研究では、ストラテジー「代名詞の理解」の指導の際に代名詞が指し示しているものをその前後2、3文あたりを読んで探すようエリア指定してしまったことで、本来、文全体を把握したうえで文脈を理解し、代名詞が何を指すのかを特定するはずである行為が、2、3文と限定された中から探す行為に変わってしまったことが要因として考えられる。つまり、上位群は文全体を読んで理解するよりも1文1文を細かくより丁寧に読んだと考えられる。また、下位群では、「メインアイデア把握」、「トピック把握」のストラテジーに対応した設問の得点が上昇しているため、文脈を理解したうえで使用する「代名詞の理解」のストラテジーと対応した設問の得点が上昇したと予測する。ここでの反省点は、ストラテジー指導の際に、エリア指定をする場合は長文全体の流れを把握していることが前提であり、ヒントとして代名詞の前後2、3文あたりを少し注意して読むと良いことを伝えることである。また、長文全体を理解しようという意識よりも代名詞が指し示すものを前後2、3文あたりから探すといった、視野を限定させないように配慮する必要もあるだろう。

5. 結論

本研究で明らかになったのは、以下の2点である。

- 1) リーディング・ストラテジー指導は、指導前にはストラテジー知識を持たない習熟度下位群のストラテジー使用意識を高める。
- 2) リーディング・ストラテジー指導は、下位群のみ長文読解を向上させる。また、ストラテジー使用意識の向上と長文読解との因果関係の分析からは、ストラテジー使用意識の向上が長文読解の向上につながったとは言えない。

日本の英語教育に対する示唆

リーディング・ストラテジーを身につけている学習者とそうでない学習者とでは長文読解に大きな差が生まれることが明らかになった。指導前からス

ストラテジーをいくつか知っていたと事後アンケートで回答した上位群は、ストラテジー使用意識は変わらず、長文読解は下降した。これは、指導前からストラテジーが既存の知識であったことによる天井効果と、ストラテジー指導が上位群が以前から用いていた知識に干渉したことが原因だった。それに対して、事後アンケートでストラテジーを指導前には知らなかったと回答した下位群は、ストラテジー使用意識も上昇し、長文読解も向上した。つまり、指導前にはストラテジーを知らず自身の読み方を確立していない下位群にストラテジー指導は効果を及ぼした。このことから、初級者のための基礎知識としてストラテジー指導をすることは長文読解力の向上につながると考える。

なお、以下が今後の課題である。

ストラテジー指導は下位群のみに効果があるとの結果であったが、1回のみ指導結果であるため、知識とその応用の浸透が不十分だった可能性がある。ストラテジー指導を継続的に行っていくことで長文読解が向上するかどうか観察する必要がある。

また、今回の実験の結果、実験群上位群の長文読解が下降した。ストラテジー指導において何をどのように教えるかによって長文読解を下げる可能性がある。ストラテジー指導を行う際は、学習者の既存の知識にも考慮した綿密な計画が必要である。

参考文献

- 足立望・大石晴美 (2017). 「習熟度別英語リーディングストラテジー指導の効果」『学習開発学研究』, 10, 57-63.
- 鈴木・森永 (2010). 「読解力とリーディング・ストラテジー活用度との相関性に関する一考察」『常葉学園大学外国語学部研究起用』, (26), 87-102.
- 藤田賢 (2008). 「リーディング・ストラテジーを意識した読解の訓練」『英語教育』, Vol. 57, No. 7, 33-35.
- 山下純一・横山吉樹 (2004). 「第二言語学習者が用いるリーディングストラテジーの発達についての考察」, 『HELES JOURNAL』, 4, 65-82.
- Pakenham et.al(2013). *Making Connections*①, New York: Cambridge University Press.
- Pakenham et.al(2013). *Making Connections*②, New York: Cambridge University Press.
- Ushiro,Yuji & Shimizu Yuko.(2007). *Reading Activator*, Tokyo: McGraw-Hill

Education.

(平成 30 年度大学院人間文化研究科

言語文化学専攻英語文学・英語教育専修修士課程修了)